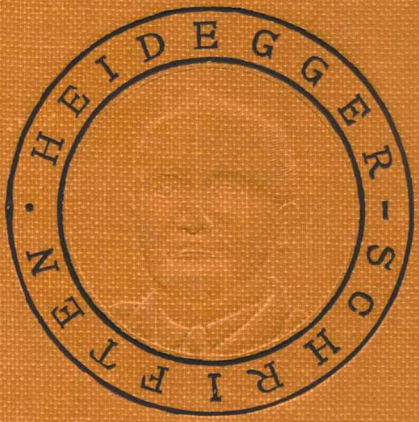
HEIDEGGER-SCHRIFTEN

マルティン・ハイデッガー

有についてのカントのテーゼ

辻村公一訳

〔ハイデッガー選集XX〕

理想社

訳者略歴

1922年，静岡県浜松に生。
1946年，京都大学文学部哲学科卒業。
現　在，京都大学教授。
［訳書］ ハイデッガー『思惟の経験より』『野の道・ヘーベル』『根拠律』その他。

昭和四十七年七月三十日　第一版第一刷発行　定価　五八〇円

訳者　辻村公一

行者　佐々木隆彦

印刷所　斗南印刷所

製本所　太陽堂製本所

東京都新宿区赤城下町四六番地
発行所　理想社
電話（二六八）一三〇六番
振替東京七八三〇三番

落丁・乱丁のものはお取替えいたします

3310-115020-8905

目　次

有についてのカントのテーゼ……三
思惟の根本命題……七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

有についてのカントのテーゼ

辻村公一譯

標題に從へば以下に於てカント哲學の教說の一端が叙述されるべきである。そのことに依つて吾々は、過ぎ去つた或る一つの哲學について、教へられるところがあるであらう。このことにはそれなりの利益があらう。併しそれは勿論、傳統に對する感覺がなほ目覺めてゐる場合、さういふ場合にだけである。

然るに、まさにさういふことこそ、現狀には殆ど當てはまらぬのであり、就中、何時からとなく絶えず如何なる處に於ても吾々人間に關はってゐるものでありながら而も吾々が殊更には注目しないもの、さういふものの傳統が問題である場合には、最も當てはまらないのである。

吾々はそれを「有」といふ語に依つて名づけてゐる。その名は、「有る」とか「有つたので有

る」とか「來りつつ有る」と吾々が言ふ場合に吾々が意味してゐる彼のものを、名づけてゐる。吾々のところにまで屆くとともに吾々がそこにまで屆くところのものはすべて、口に出して言はれると否とに不拘、「それは有る」といふことを、通過して行く。事態がそのやうであるといふこと、そのことから吾々は何時如何なる處に於ても決して逃れて行くことは出來ないのである。「有る」といふことは、それが示す明白な諸變化そして又隱密な諸變化のすべてに亘つて、常に吾々に熟知されてゐる。而もそれにも不拘、「有」といふこの語が吾々の耳を打つや否や、吾々は直ちに次の如くに確乎として斷言するのである、すなはち、ひとはその語の下では自分自身に何も表象することが出來ない、ひとはその語の許では自分自身に何も思惟することが出來ないと。

恐らく、この性急な確認は正しいであらう。その確認は次のことを當然なこととして正當化する、すなはちそれは、「有」についての——雜談とまでは言はなくても——論議にひとは癇癪を起し、而も非道く腹を立てて「有」を嘲笑の的にする、といふことである。有について些かも追思することなく、そこ〈有〉に至る思惟の道について些かも省察することなしに、ひとは不遜にも、「有」といふ語が果してものを言ふか否かを決定する法廷たらむとする(a)である。そのやう

にして無思慮が原理にまで高められてゐるといふこと、そのことになほ躓きを感じる人は殆ど誰一人としてない。

曾つては吾々の歴史的現有の源泉であつたもの、それが今では嘲笑の砂に埋もれ塞がれてゐるといふこと、そのやうなところにまで事態が來てしまつてゐるとすれば、或る一つの單純な熟慮に立ち入ることが、奬められて然るべきであらう。

ひとは「有」といふ語の許では自分自身に何も思惟することが出來ない。「有」とは何を謂ふのか、そのことについて或る教示を與へることこそ從つて諸々の思想家の任とする事柄であらう、さういふ推察が成り立つのであるが、その推察に關しては一體如何なる事態になつてゐるのであらうか。もしそのやうな教示〈を與へること〉ですら思想家達にとつては十分な程重いことであるとすれば、その場合には少くとも次のことが彼等のなすべき事柄に留まり得るであらう、すなはちそれは、有を思惟に値するものとして常に繰返し示し、而もこの思惟に値するものがまさにかくの如きものとして人々の視圏の内に留在するやうに、示すことである。

吾々は上に言はれた推察に從はう、そして或る一人の思想家について、彼が一體何を有につい

て吾々に言ふべきこととしてもつてゐるかに、傾聽するとしよう。吾々はカントの言ふことに聽かう。

〈併し〉一體何故に吾々は、有について若干のことを經驗するために、カントの言ふことに傾聽するのか。それがさうされるのは二つの理由によつてである。その一つは、有の所在究明に於て或る一つの遠くにまで達する歩みをカントが遂行した、といふことである。もう一つは、カントのこの歩みが傳統への忠實さから、といふことは同時に傳統との對決の內で、結果し、その對決を通じて傳統は或る新しい光の內に到達する、といふことである。有についてのカントのテーゼへ言及し指示することのこの兩方の理由は、吾々に省察への或る衝擊を與へる媒介となる。

有についてのカントのテーゼは、彼の主著たる「純粹理性批判」(一七八一年)の內に於けるその體裁に從へば、次の如くに言はれてゐる、すなはち、

「有は明らかに如何なるレアルな述語でもなく、すなはち、一つの物の概念に附け加はつて來ることの出來るやうな何か或るもの、さういふ或るものの概念ではない。それは單に、一つの物を、もしくは一定の諸規定を、それら自身に於て定立することである」(A598, B626)と。

今日有るもの、すなはち有るものとしては吾々を壓迫し可能的なる非有としては吾々を脅迫するもの、さういふものに直面しては、有についてのカントのテーゼは吾々には抽象的にして乏しく色褪せたもののやうに思はれる。併し乍ら、その間に實際ひとは亦哲學に次のことを要求したのである、すなはちそれは、哲學は最早、世界を解釋したり諸々の抽象的な思辯の内にうろうろすることに滿足すべきではなく、世界を實踐的に變革することが問題であらう、といふ要求である。併し乍ら、そのやうに思惟された世界變革は、上に言はれた要求の背後にも實際既に思惟の或る變革が存してゐる如く、思惟が變つて行くことを、豫め必要とする（Vgl. Karl Marx, Deutsche Ideologie: „A. *Thesen über Feuerbach* ad Feuerbach, 11“:「哲學者達は世界をただ様々に解釋してきたに過ぎない、世界を變革することが問題であらうのに。」）。

併し、思惟に値するものの内へ入つて行く道、その道へ思惟が出立するのでないとすれば、抑抑如何なる仕方で思惟は變つて行くべきであらうか。ところで併し、有がそれ自身を思惟に値するものとして與へるといふこと、このことは任意的な前提でもなく恣意的な發案でもない。それは傳統の箴言であり、その傳統は今日でもなほ吾々を規定してゐるのであり、而もひとがそのこ

とを承認しようと欲するよりも遙かに決定的に、吾々を規定してゐるのである。

カントのテーゼが抽象的にして乏しきテーゼとして〈吾々に〉他所他所しく思はれるのは、ただ次の場合にだけである、すなはちそれは、このテーゼの解明のためにカントは何を言つてゐるのか、更に彼はそのことを如何に言つてゐるのかといふことを、追思することを吾々が怠る場合である。彼がこのテーゼを解明する道に、吾々は從つて行かねばならない。その内にその道が通つてゐるところの境域を、吾々は吾々の眼前に齎してこなければならない。「有」といふ名の下でカントがその所在を究明してゐる事柄がそこにこそ適はしく所屬してゐるところの場所〈所在〉を、吾々は熟思しなければならない。

そのやうなことを吾々が試みるならば、或る驚くべきことがそれ自身を示してくる。すなはちそれは、カントは彼のテーゼを寧ろただ「挿話的」にしか、すなはち彼の諸々の主要著作に對する幾つかの挿入句、註解、附錄といふ形式に於てしか解明してはゐない、といふことである。そのテーゼは、その實質とその射程とに適はしき仕方で或る一つの體系の原始命題として擧立されてゐるのではなく、更に一箇の體系へと展開されてゐるのでもない。一見缺點の如くに見えるこ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

のことは、併し乍ら次の如き長所をもつてゐる、すなはちその長所とは、様々な挿話的な箇處に於てその都度カントの或る根源的省察が言葉になつて現れて來てをり、その省察は完結的省察であると自ら思ひこむ妄想に決して取りつかれてゐない、といふことである。

カントのそのやうな行き方に倣つて以下の叙述はそれと相等しい行き方をしなければならない。その叙述は次の如き意圖に依つて導かれてゐる、すなはちその意圖とは、カントのこのテーゼは彼の著作の建築術の殊更に打建てられた骨組を形造つてゐないとはいへ、このテーゼの主導思想が、そのテーゼに對してカントのなした一切の解明を貫いて、といふことは彼の哲學の根本の立場を貫いて、到る處で如何に輝き透つてゐるかを、見えしめるといふ意圖である。それ故、ここで遵守される〈叙述の〉進め方は次のことを目當てにして配置されてゐる、すなはちそのこととは、幾つかの適當な本文を相互に對照せしめることに依つて、それらの本文が交互に照明し合ふやうにし、そのことを通して、直接的には言ひ表され得ない彼のものがそれでもなほ表面に現れて來るやうにする、といふことである。

吾々がこのやうな仕方でカントのテーゼを追—思惟するならば、その時初めて吾々は、有への

問のもつ困難さの全體と併し亦その問のもつ決定的な點と問に値する點とを、經驗するのである。その時初めて次のことへの省察が目覺めるのであり、そのこととは、カントのテーゼと或る對決を敢てなす資格が果してそして亦如何なる程度にまで、現代的思惟に既に與へられてゐるか、といふことであり、その場合對決をなすとは、有についてのカントのテーゼは一體何處に基づいてゐるのか、そのテーゼは一體如何なる意味に於て根據づけといふことを許容するのか、そのテーゼは一體如何なる仕方でその所在が究明され得るのかと、問ふことである。これらの問に依つて特色づけられる思惟の諸課題は、暫定的であることを免れない最初の叙述のなし得る諸々の可能性を、踏み越えており、今日なほ行はれてゐる通例の思惟の能力をも、踏み越えてゐる。それだけに一層、傳統の言ふことに追思しつつ傾聽することが、依然として切要であり、追思しつつ傾聽することは、過ぎ去つたものの後を追つて執着するのではなく、現在するものを熟思するのである。カントのテーゼをもう一度繰返さう、すなはち、

「有は明らかに如何なるレアルな述語でもなく、すなはち、一つの物の概念に附け加はつて來ることの出來るやうな何か或るもの、さういふ或るものの概念ではない。それは單に、一つの

物を、もしくは一定の諸規定を、それら自身に於て定立することである。」

カントのテーゼは二つの陳述を含んでゐる。第一の陳述は否定的陳述であり、それはレアルな述語といふ性格を有に否認してゐるが、とはいへ述語一般といふ性格を否認してゐるのでは決してない。從つて、そのテーゼのそれに續く肯定的陳述は有を「單に定立すること」として特色づけるのである。

テーゼの內容がその兩方の陳述に配分された今でさへも、「有」といふ語の許では何も思惟されないといふ臆見、さういふ臆見を防ぐことは吾々には難しい。併し乍ら、吾々が〈このテーゼの〉一層精確な解明を企てるに先立つて、「純粹理性批判」の構成と行程との內部に於て一體如何なる箇處でカントは彼のテーゼを語り出してゐるのかといふこと、そのことに吾々が注目するならば、手の着け樣もないといふ現在の窮境は減少し、カントのテーゼは一層親しいものとなる。

ここで行きずりにほんの一寸或る一つの否認され得ぬ出來事を想起して置かう、すなはちそれは、西洋的—ヨーロッパ的思惟は「有るものとは何で有るか」といふ問に依つて導かれてゐる、といふことである。そのやうな形でその思惟は有を問ふてゐる。この思惟の歷史の內でカントは

或る一つの決定的な轉回を、而も「純粹理性批判」を通して、遂行したのである。そのことに關して吾々は次のことを期待する、すなはち、カントは、有の所在究明と彼のテーゼの擧立とを以つて、彼の主著を導く主導思想を進行の內に齎したのであると。〈併し〉それはさうではなかつたのである。さうではなくして、吾々は「純粹理性批判」の最後の三分の一の部分に至つて初めて上記のテーゼに行き當るのであり、而もそれは「神の存在の有論的證明の不可能性について」(A592, B620) といふ標題を附せられてゐる節の內に於てである。

併し乍ら、吾々はもう一度、西洋的—ヨーロッパ的思惟の歷史を想起しよう、さうするならば吾々は次のことを經驗する、すなはちそれは、有への問は有るものの有への問として二形的である、といふことである。それは第一に次のやうに問ふ、すなはち、有るものは有るものとして一般に何で有るかと。この問の圈域に屬する諸考察は哲學の歷史の經過の內で有論といふ標題の下に到達する。「有るものとは何で有るか」といふ問は同時に次のやうに問ふ、すなはち、有るものは最高の有るものといふ意味に於ては如何なるもので有り、そして又如何に有るかと。それは神的なるものと神とへの問である。この問の圈域は神論と稱せられる。有るものの有への問の二

形性格は、有—神—論といふ標題の内へと取纒められる。有るものとは何で有るかといふ二形的な問は、第一には、（一般に）有るものとは何で有るか、といふことである。その問は、更には、（端的に）有るものとは何（如何なるもの）で有るか、といふことである。

有るものへの問の二形性格は明らかに、有るものの有がそれ自身を示すその示し方に、存してゐるに違ひない。有はそれ自身を吾々が根據と名づけてゐるもの、さういふものの性格に於て、示してゐる。有るもの一般は地盤といふ意味での根據であり、その地盤の上で、有るものの更に立ち入つた如何なる考察も動くのである。最高の有るものとしての有るものは、一切の有るものを有の内へと發源せしめるものといふ意味での根據である。

有が根據として規定されてゐるといふこと、そのことをひとは今まで最も自明的なことと見做してゐる、とはいへ併しそれは最も問に値することである。一體如何なる點に於て有を根據として規定することが出て來るのか、一體何處に根據の本質は存するのか、それはここでは究明され得ない。併し、一見したところ外面的とおもはれる考慮にとつてさへも既に、次の如き推察が押し迫つて來る、すなはちその推察とは、有を定立として規定したカントの規定の内には、吾々が

根據と名づけてゐるものとの或る親緣性が統べてゐる、といふことである。positio, ponere〈定立、定立する〉とは、setzen, stellen, legen, liegen, *vor*liegen, zum Grunde liegen〈定立する、立てる、置く、横はる、前に横はる、根底〈根據〉に横はる〉といふことを意味する。

有論神論的に問ふことの歷史の經過の內で次の如き課題が成立する、すなはちそれは、最高の有るものが何で有るかを、證示するのみならず、有るものの中で最も有るものたるこのものが有る、すなはち神が存在するといふことを、證明することである。存在、現存在、現實性といふこれらの語は、或る一つの有り方を名づけてゐる。

一七六三年、すなはち「純粹理性批判」の出現に先立つ殆ど二十年も前に、カントは「神の現存在の證明のための唯一可能なる證明根據」といふ標題の下で一つの著作を公刊した。この著作の「第一考察」は、「現存在一般」と「有一般」といふ概念について論じてゐる。吾々は既にこの箇處に於て有についてのカントのテーゼを見出すのであり、而もそれが亦否定的陳述と肯定的陳述といふ二重の形式を取つてゐることをも見出すのである。この兩陳述といふ體裁は、「純粹理性批判」の內に於けるそれと、或る仕方では合致してゐる。批判以前の時期に屬するこの著作

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com